



随 想

'74県政に対する期待や提言

としがどんな年となるか皆さんも予測もつかれないでしょう。しかし全智全能を総動員してこの難解な一年を過ぎさねばなりません。同様に県政もこの大波にもまれて進まねばなりません、かじとりだけは方向をあやまることはできません。そこで、今回は、各界各層の方々にそれぞれの立場からとしの県政に対する期待や提言をお願いしてみました。

小さな声、弱い者の声も聞き届けて

河野正夫

日曜日の朝、自転車でくぬぎ林の中の舗装道路を気ままに乗りまわす。林の中を一直線に分離帯の白線が走って、広い畑の中につづいている。以前に比べると、道路も随分とよくなったものだとしみじみと思う。ところが、翌朝の出動時になると、延々と連なる車の列、イライラしながら一寸きさみの、のろのろ運転に、もう少しこの道もなんとかならんのかと、ついつい不平が口に出る。道端には、幼稚園児が通園バスを待っている。その横を通り抜ける車の上から、危いなあ、事故が起こらなければいいがと気になる。母親の気持としては、子供が帰ってくるまで気が気ではないだろう。幼稚園をもう少しつくってほしい、近くにあればこんな心配もなくていいのに、という気持にもなることだろう。身体が弱い老人は、老人医療なり老齢年金なり、もう少し改善していただけないものかと、福祉行政の充実を希望するだろう。主婦は主婦で、毎日の生活費が、日に日に高くなるのを見るにつけ、物価政策に、いかりをぶつけたくなるだろう。又、主人の給料のアップ額が、物価のアップに追いつかない、もっと月給を上げてもらいたいという要求になってくる。

とにかく、政治や行政に対する住民の

要望が、それぞれ自分の生活、自分の環境に於いて最も自分に関係のある事柄から発生してくる。特に、市町村や県に対する要望は、身近な問題であるが故に、一段と強いものになってくる。ところが、月給袋から毎月天引きされる税金の高さは腹が立つ。税金の高さの割りに、行政サービスが低いと考えては、更に不平に輪をかけてことになる。

市町村も県も、仲々大変なことでしょう。然し、そうした住民の声が政治や行政に反映されることを県民は期待しているのです。

知事さんが、県民の意見を大いに聞き、要望に耳を傾け、対話の県政を推進すると、いつも言っておられます。その姿勢に県民は拍手を送ります。組織化された大きな声ばかりでなく、小さな声も弱い者の声も、どうか聞き届けていただくこと、これも一般県民の願いでしょう。

昭和四十八年は、熊本県民にとってはいやなこと、不幸なことが余りに多過ぎた感じでした。願わくば、昭和四十九年は、明るく、幸せな年でありませうと祈りたい気持です。そして、県政が、その方向で力強く前進することを望んでいます。これこそ、県政に対する県民の一番の要望ではないでしょうか。

(西合志町)

児童福祉について思うこと

松本孝治

昭和四十九年の新春を迎えまして、今年も児童福祉の明るい話題を期待したいものです。わが国に児童福祉法が制定せられてから、ちょうど二十八年目を迎えたわけでありますが、当時からいろいろと考えてみまうに、熊本県の児童福祉も大変充実してきたものだと思います。また全国的にこれを眺めてみまうと、養護施設在所中の幼児の占める割合は、依然として増加の一途をたどっており、しかも、最近の特徴として注目すべきことは、その低年齢化であり、従来大都市の施設に特に多かった幼児が、地方の施設にも増加現象がみられることとあります。その直接的な原因としては、離婚の増加、親の養育、母親の病氣入院、あるいは親の育児意識の欠如など、要養護幼児の生み出される家庭的・社会的背景のなかでその原因は、いろいろとあげられるわけでありまう。工業化は母性愛の稀薄化と社会の離散化をもたらすとJ・ポールビーは言っておりますが、最近の子殺し、子捨て事件や、要養護児童の発生状況からも、又要養護幼児の激増の現況からみても、わが国もその例外ではなかったことを教えられているようにも思われます。

ろいろの衛生指標の低いところでは、なお、その拡充強化が必要である。この数年来の本県の衛生行政をみてみると、老人対策、公害問題、過疎対策などを含めて、次第に向上改善の姿勢と方向はみられるが、それでも何か、大きな志が一本ほしいと感じられていた。本年度から、県のプロジェクトチームとして、保健医療対策推進本部が設置され、先に中間報告を出して、今後の熊本県の保健医療への対策を示している。その中には、県民の保健推進策と、これに対応する行政のあり方をいろいろと論じており、一応はうなずける点も多いが、実施に当たっては、なお綿密な計画を要するものもあり、また、県民が、一様の恩恵を受け得るよう配慮すべき点も多々見当るようである。

衛生行政に対する抱負と期待

井尾重雄

中東紛争に起因した石油危機は、インフレ、物資不足をさらにおおりに立て、内閣改造を機に、これまでの日本の政治路線の大きな変更を余儀なくされてしまった。とにかく、今までは、国では福祉国家の建設が唱えられながら、なお経済成長路線の方が大きかったが、エネルギー抑制による経済成長の停止は、全くの国民生活の方向変換を意味するもので、今後は、一段と政治が国民の福祉向上へ目をむけなければならぬ時代が到来したものである。

県民の健康な生活と福祉の向上には、各種団体の協力もさることながら、県衛生部を中心とした行政体制の充実が根本をなすものである。ことに、本県のように、全国有数の過疎県であり、しかもい

私は、実地医家として、診療に従事しているものであるが、病人のみを対照としてでなく、健康者がより健康を維持出来るような、いろいろな企画があれば喜んで参加するつもりである。衛生行政が、より大所高所から県民生活の向上に寄与されるよう、誰よりも期待するもの一人である。

(熊本市・医師)

県教育界への提言

下瀬桂子

「M君は高校はケンリッに行くてよ。ケンリッは月謝が安いから。お母さんケンリッで何ね。」小学四年の長男の質問である。こういう無邪気な質問を受けるたび

に思うことは、あと何年こんなのにぶりしていられるかということである。幼き日、「もういくつ寝るとお正月」と指折り数えて待ちわびた正月も、受験生にとっては、さあ、入試が近づいたと気が重くなるばかりだろう。さて、近年の本県の大学合格者の質の低下はどうしたことだろう。熊大に他県出身者が多くなったことは聞いて久しいが、何も熊大のみではなく、いわゆる一流大学と言われる大学への合格者の少なさはどうだろう。

原因は何か。本県の高校がピラミッド型となっていることではないだろうか。中学校では三学期になれば、志望校決定が行われる。しかしその際、担任、父母、生徒間で話し合われるのは、ある線からはA校、次はB、C、D……と振り分けられる選別以外の何ものでもない。

県では教員の広域交流を実施して県立高校間の格差是正にとめて聞いている。しかし入学して来る生徒はすでに中学で能力別に選別されているのだから、いくら教員を適切に配置した処で、三年間を経た後、C、D……校から一流大学への合格者が続出するとは考えられない。しかも、A校でさえも、県内ではトップでも、最近の合格者数の何と情けないことか。

他県では、総合選抜制を採用して、各校間の望ましい競合関係を作り上げ、全体的なレベルアップを図って成功した例も多いと聞く。高校が全体的にレベルアップすれば、中小学校にも好影響